

> システム構築だけで終わらない 真のデータ保護ソリューションのために 多くの導入案件からノウハウを蓄積したデータ保護の プロが教えるArcserve製品導入・運用のポイントとは

ユーザプロフィール

業 種：システムインテグレータ
会社名：ベルサス・テクノロジー株式会社



バックアップをはじめとするデータ保護ソリューションに特化したプロ集団

ベルサス・テクノロジー株式会社（以下、ベルサス・テクノロジー）は、バックアップに特化したニッチな市場において、他社に真似できない高度な技術でデータ保護システムを構築する、知る人ぞ知るソリューションプロバイダーだ。2006年、同社取締役である新見 泰加氏がエンジニアを集めて会社を立ち上げ、来年で10周年を迎える。新見氏は、自社の特徴を次のように語る。

「社員数は数名と規模は小さいのですが、バックアップに特化したサービスだけを提供する私たちのような企業は、国内ではほかにないようです。データ保護分野に関しては、最も精通している技術者集団であると自負しています」

設立当初は1社だった取扱いメーカーも、お客様のニーズに応じていく中で複数になった。Arcserveもそのメーカーの1社だ。Arcserve Japanの一次代理店である株式会社ネットワークは、技術支援における最も信頼するパートナーの1社として、受注した案件の導入・構築支援をベルサス・テクノロジーに依頼している。また、提案段階から一緒に案件に入り込むことも少なくない。ネットワークが発掘してきた案件の大枠な要件をヒアリングして、適した製品を絞り込んだ後、ベルサス・テクノロジーと共に詳細を詰めていくといった協力体制もとっている。特にArcserve製品案件でのパートナーシップは固い。Arcserve製品の特長について、新見氏は次のように説明する。

「私たちが取り扱う複数の製品の中でも、Arcserve シリーズはメーカーサポートのレスポンスが非常に良く、製品の技術水準も高いと感じます。そしてなにより、インターフェースが一番見やすいと感じます。また、海外メーカーの製品は、マニュアルの日本語訳の精度が甘く、ユーザーとのコミュニケーションにおいて混乱することも多いのですが、Arcserve 製品の場合は日本人に対する説明に適したしっかりとしたマニュアルが用意されています。技術側としてこれは、非常に大きなポイントです」



取締役
新見泰加氏



システム技術部
営業グループ
竹熊礼子氏

データ保護ソリューションは、クラウドの台頭によってバックアップ先の多様化が進んでいる。このような状況の中、クラウドという選択は、技術面よりもむしろ通信回線の物理的制約という部分でまだ課



題が残る、と新見氏は指摘する。

「企業の保有するデータ量が急速に増大する中、クラウドに代表される遠隔地へのデータ保管は、回線速度がデータ量に追いついていないのが現実です。もちろん、バックアップは数日間がかりでやればよいという企業もあるかもしれませんが、リストアはそういうわけにいきません。それは、実際何かあったとき、エンドユーザーが一番実感するところのはずです。」

データ保護ソリューションは、バックアップシステムを構築し導入すればそれで終わりではない。バックアップの目的はあくまでリストアにあり、それをエンドユーザーが十分に理解したうえでバックアップシステムを導入し、リストアまで確認したうえで運用してほしい、と新見氏は強調する。そんなデータ保護のプロに、3つの Arcserve 製品について、導入・運用時に企業が見落としがちなポイントをたずねた。

いざというときのため、必ずリストア手順を把握しておきたい「Arcserve Backup」

バックアップ対象データの分析で「スループット低下」を解決に導く現場技

『Arcserve Backup』は、Oracle Database や SQL、Exchange Server などのミドルウェアアプリケーションが稼働するシステムや、バックアップを高頻度で行いたい、記録メディアとしてテープ装置を使いたいという場合に選ばれることが多いのが特徴です。導入実績も多く、製品の評価も高いため、導入時の問題はほぼないと考えていいと思います。あえて言うなら、バックアップ時のスループット低下についての対策がポイントになるでしょう」

短時間で確実にバックアップを行うことは、製品を問わず、バックアップソリューション全体に共通する課題だ。だが、その答えは今も得られていないのが実情だという。

「現時点の対策は、製品の選択よりもむしろテクニックやノウハウでの対応力が問われる部分と言わざるを得ません。一般的には、レジストリやパラメータのチューニング、ネットワークの二重化などを考えていくことになりませんが、チューニングによる対策には限界があり、ハードウェアの追加投資は難しいというのが多くの企業の現実です。こうした場合、私たち技術者はバックアップデータのフォルダ構成やファイル数、更新頻度などの解析を行い、その最適化を図るといふ対策をとっています」

フォルダを分割し、フォルダ内のファイル数を減らして、転送速度を高めることはその分かりやすい例。またデータ更新がほとんど行われないうフォルダの場合、バックアップ頻度を減らすことも効果があるという。

「いざリストアが必要になったとき、その操作法が分からないというケースが実は少なくないのです。『Arcserve Backup』は使いやすいソフトですが、リストアデータ検索方法には多少クセがあります。マニュアルに目を通すことはもちろんですが、導入時にリストアの操作を試しておくことで、実際に問題が起こったときの対応を確実に理解しておくことが大切です」

だが本稼働中のシステムでテストは行いたくないというのが、多くの企業のデータ管理者の思いであるに違いない。そんな場合に備え、Arcserve やネットワールドでは各種セミナーやハンズオントレーニングを開催しているので、管理者は、ぜひ一度は参加しておきたい。

Arcserve シリーズ 無償ハンズオントレーニング・セミナー

<http://www.arcserve.com/jp/lpg/seminar.aspx>

導入・運用が極めて容易な「Arcserve UDP」。要件に応じて適したエディションを選ぶこと

Arcserve の製品群において、イメージバックアップソリューションを中核とした、次世代のバックアップ製品に位置



づけられるのが『Arcserve Unified Data Protection (以下、Arcserve UDP)』だ。

『Arcserve UDP』は、より仮想化環境に適した製品と言えます。サーバの OS、アプリケーション、データを一つのイメージとしてバックアップできるため、多くはシステムとファイルを丸ごとバックアップしたいという目的で導入されます。手間が少なく、フォルダ階層ごとの選択なども不要で、インターフェースもよくできているので、ユーザーとしては非常にやる事が少なく済む点も選ばれている理由です。また、バックアップスケジュールの設定だけで開始できるなど、運用も容易です」

注意点として新見氏が指摘するのは、エディションと呼ばれる5つのラインナップのうち、要件に適したエディションを間違えずに選ぶことだという。

「相違点を理解してしまえばとても分かりやすい製品体系なのですが、違うエディションを選んでしまうと、自分たちのバックアップに対する要件が満たされない場合がありますので、何をしたいのかをしっかりと確認したうえで選択する必要があります。また、非常に簡単にバックアップはできるのですが、きちんとバックアップ設定をして実行しないと、バックアップを取ったけれどもリストアしようとするとき正しく動かないということもあるので、できればお勧めする手順を踏んで進めていただきたいと思います」

要件によって選べるエディション

バックアップ対象	サーバ用 エディション				クライアント用 PC
	Standard	Advanced	Premium	Premium Plus	Workstation
バックアップ要件					
データおよびシステムのバックアップ (Windows, Linux)	●	●	●	●	●
統合管理	●	●	●	●	●
クラウドへのバックアップ データの転送	●	●	●	●	●
仮想マシンのエージェントレス バックアップ	●	●	●	●	
アプリケーションのオンライン バックアップ (SQL Server, Exchange Server, Oracle*3)	*2	●	●	●	
Arcserve Backup 全機能 *1			●	●	
Arcserve Replication ファイル サーバ機能			●	●	
Arcserve Replication 全機能 *1				●	

*1: 対象は日本でサポートしている機能・動作要件掲載製品

*2: 無償版の SQL Server Express Edition のみオンライン バックアップ可

*3: 対象は Windows 版 Oracle データベース, Arcserve UDP 5.0 Update2 以降で対応

リストアの待ち時間を不要にする一方、初期同期に時間がかかるという一面も 「Arcserve Replication / High Availability」

『Arcserve Replication / High Availability』は、本番運用中のサーバデータをレプリカサーバに複製するレプリケーション製品だ。本番機が故障した際、もう一方のサーバにすぐに切り替えることで、切れ目なく業務が継続できることが最大のメリットだ。

「リストア時の復旧に2、3日かかるなど不便な経験をしたことが導入のきっかけになることが多いようで、導入するユーザーの8割近くはすでにバックアップ環境を構築済みです。レプリカサーバは遠隔地に置くことが一般的ですが、クラスタシステムの代用として同じ場所で運用するケースもあります」



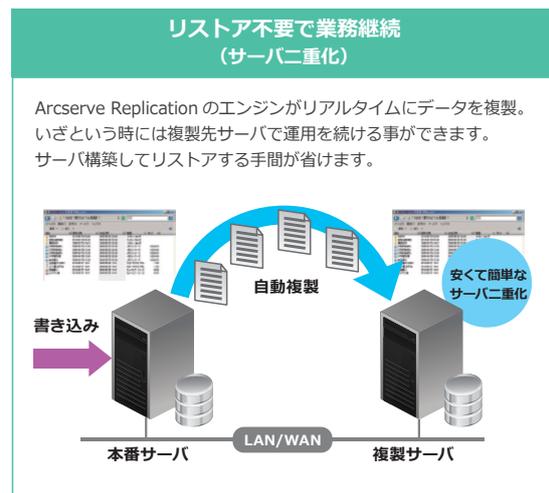
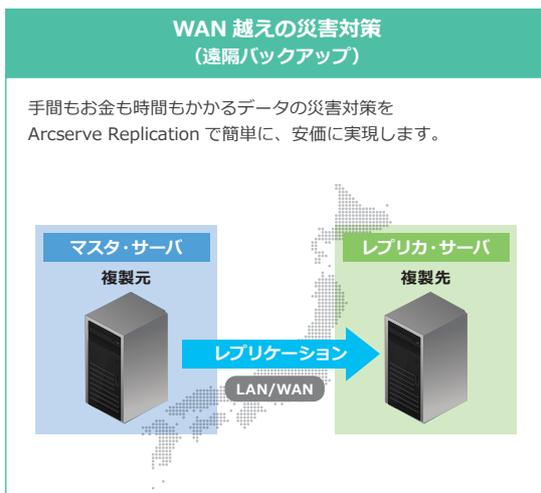
注意点は、世代管理が難しいという点だ。この点においても、運用はバックアップとの併用が基本になる。また、導入に先立ち、サーバ同期に時間がかかるという特性はぜひ知っておいてほしいと新見氏は言う。

「データ量にもよりますが、導入時のレプリケーションへのデータコピーと同期の確認には、多い場合は10日もかかることがあり、またメンテナンスのため再起動するときの同期にも、数時間は必要になります。この手間を嫌い、メンテナンスが行き届かないまま運用するケースがあることも気になる点の一つです」

また障害発生時のフェールオーバーは手動/自動の選択が可能だが、同社の場合、ユーザーからの指定がなければ、本番サーバ、レプリカサーバ共に手動のフェールオーバー設定を選択しているという。自動的な切り替えは、何がきっかけで切り替わったかの解明が難しい場合も多く、傷口が広がることにつながりかねない。とはいえ、慣れていないと手動のフェールオーバーは難しいため、同社は分かりやすい手順書を用意し、ユーザーに提供しているという。

カタログセンター：Arcserve 製品紹介・技術資料はこちらから
<http://www.arcserve.com/jp/lpg/catalog-center.aspx>

Arcserve Replication よくある導入シーン



事業の多角化ではなく、SE としての高い技術力で勝負し続ける

確かな技術力とバックアップシステム導入・構築に対する豊富な経験から紡ぎ出されるこれらの指摘は、今後の製品開発とサービスのあり方にも一石を投じることになることは間違いない。ベルサス・テクノロジーは、ユーザーサポートの向上を目的としたメーカーや販売店との情報共有こそ視野に入れているものの、現在のところ事業の多角化などは検討していないという。それも、SE としてのスキルにゆるぎない自信があることの裏付けと言えるだろう。今後も、少数精鋭型のデータ保護のスペシャリスト集団として、ベルサス・テクノロジーは歩み続ける考えだ。



Arcserve Japan

お問い合わせ
 Arcserve ジャパン・ダイレクト (0120-702-600)
 JapanDirect@arcserve.com
 WEB サイト: www.arcserve.com/jp
 ※記載事項は変更になる場合がございます。 2015年12月現在

株式会社ネットワーク <http://www.networld.co.jp/>

お問い合わせ arcserve-info@networld.co.jp

本社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-11-15 住友商事神保町ビル	TEL:03-5210-5020,5031,5095
関西支店	〒530-0001 大阪市北区梅田3-3-20 明治安田生命大阪梅田ビル 24F	TEL:06-7664-5400
中部支店	〒451-6008 名古屋西区牛島町6-1 名古屋ルーセントタワー 8F	TEL:052-588-7611
九州支店	〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-6-1 九勤筑紫通ビル 3F	TEL:092-461-7815